

一筆啓上

作左通信



第一号 平成十二年一月十日(金)発行

「一筆啓上」火の用心 お
仙 泣かすな 馬肥やせ」
これは、本多作左衛門重
次が、陣中から妻に宛てた
「日本一短い手紙」で、簡
潔にして要を得た書簡とし
て有名です。

「一筆啓上」とは、一筆
申し上げます。「お仙」と
は、息子の仙千代(のちの
福井県丸岡城主)、「馬肥
やせ」は、主君徳川家康の
命令がいつきても戦いに出
られるように、馬の世話を
十分におこなうということ
です。この手紙には、家を

思い、子を愛し、さらにい
つも主君を忘れぬ作左衛門
の心が、よく表れています。

本多作左衛門は、享禄二
年(一五二九年)、現在の宮
地町に生まれました。犬頭
神社には、その生誕の碑が
立っています。作左衛門は
家康の家臣で、岡崎三奉行
の一人。特に、短気で頑固
な性格のため「鬼作左」と
言われ、周りから大変恐れ
られていました。

作左衛門にまつわるエピ
ソードはいろいろあります
が、その一つを紹介します。

小牧・長久手の合戦(一
五八四年)の後、豊臣秀吉
は、実母の大政所を人質
にさし出してまで、家康を
上洛(京都へ行くこと)さ
せました。

ところが、家康の留守中、
岡崎城の一角、大政所の住
居の周りにはなぜか薪が積
み上げられていました。作
左衛門は、上洛した家康に
万一のことがあれば、直ち
に人質の大政所を焼き殺す
つもりでいたのです。

しかし、家康の身を案じ
たこの行動が、秀吉の怒り
に触れてしまいました。さ
らに、作左衛門は子の仙千
代を上洛させず、また小田
原出陣の際も、秀吉から岡
崎城へ招かれましたが、つ
いに見参しませんでした。

こうしたことから、作左
衛門に切腹の命令が下され
ました。その後、家康のお
かげでかろうじて命は救わ
れましたが、下総国(茨城
県取手市)へ追放されてし
まいました。

頑固な反面、家族を愛し、
相手の立場を考え、自分の
信念を貫くところに本多作
左衛門の魅力があります。
これからみなさんとともに、
本多作左衛門の人間的な魅
力を探っていきましょう。

